

4月21日（火）

会場	開会式会場 ホールA	第1会場 ホールC	第2会場 ホールB5	第3会場 ホールB7-1	第4会場 ホールB7-2	第5会場 ホールD5	第6会場 ホールD7
8:00	受付						
9:00							
10:00	開会式						
11:00	基調講演 One Health アプローチによる パンデミック・インフルエンザの 理解と対策						
12:00	ランチョンセミナー等						
13:00							
14:00	JVMA企画① 【スポーツ】			プログラム3-1 【Vector borne diseases: 感染症生態学の 視点から】	プログラム4-1 【小動物のアニマル ウェルフェア】	プログラム5-1 WVA総会	プログラム6-1 【最新牛輸液療法】
15:00							
16:00		JVMA企画② 【伴侶動物医療の未来】					
17:00							
18:00							
19:00							

4月22日（水）

8:00	受付						
9:00			プログラム2-2 【先端臨床獣医学】 獣医領域における 個別化診療	プログラム3-2 【豚の越境性感染症の 現状とその制御戦略】	プログラム4-2 【臨床領域と病理領域 におけるAIデータ サイエンスの活用】	プログラム5-2 WVA ワンヘルスマジック	プログラム6-2 【牛呼吸器疾患】 （シンポジウム）
10:00							
11:00							
12:00	ランチョンセミナー等						
13:00		JVMA企画④ 【愛玩動物看護】	プログラム2-3(1) 【先端臨床獣医学】 心臓血管領域の革新	プログラム3-3 【反芻家畜の越境性 感染症の現状とその 制御戦略】	プログラム4-3(1) 【感染症領域におけ るAIデータサイエン スの活用】	プログラム5-3 WVA ワンヘルスマジック	プログラム6-3(1) 【子牛の軟部外科の 最前線】
14:00			プログラム2-3(2) 【先端臨床獣医学】 ロボット手術		プログラム4-3(2) 【飼育衛生管理にお けるAIデータサイエン スの活用】		プログラム6-3(2) 【乳牛の健康を守る 新しいパラダイム】
15:00							
16:00							
17:00							

4月23日（木）

8:00	受付						
9:00		JVMA企画⑦-1 【ペットと飼主の健康: Thanks Buddy!】	プログラム2-4 【先進的再生医療の 現状と臨床応用に向 けた課題】	プログラム3-4 【豚熱とアフリカ豚 熱に対するワクチン 戦略の現状と未来】	プログラム4-4 【新興・再興脅威と してのコウモリ媒介 感染症】	プログラム5-4 WVA アニマルウェル フェアセミナー	プログラム6-4 【法獣医学の発展】
10:00							
11:00							
12:00	ランチョンセミナー等						
13:00		プログラム1-5 【伴侶動物臨床：動 物の健康と福祉シン ポジウム】	プログラム2-5 【外来種による感染 症の潜在的リスク】	準備	準備	プログラム5-5(1) WVA 獣医学教育セミナー	プログラム6-5(1) 【ワンヘルスの視点 からみた薬剤耐性】 （シンポジウム）
14:00						プログラム5-5(2) WVA 医薬品適正使用に関 するワークショップ	プログラム6-5(2) 【水産動物における AMR: ワンウォータ ーの視点から】
15:00							
16:00							
17:00							
18:00							
19:00				オフィシャルディナー			
20:00							

4月24日（金）

8:00	受付						
9:00		準備	市民講座 【ワンヘルスのいろ いろなカタチ】		プログラム4-6 【哺乳類に対する鳥 インフルエンザの 新たな脅威】	プログラム5-6 【野生動物のサーベ ランスと疾病生態学】	プログラム6-6 【ワンヘルスによる 薬剤耐性への取組】
10:00							
11:00							
12:00		閉会式					

第7会場 G502	第8会場 G402	第9会場 G409	第10会場 G602	第11会場 G701	第12会場 ホールD1	ホール ホールE
						オープニング
プログラム7-1 【獣医学教育改革 への挑戦 米国における 獣医臨床教育】	プログラム8-1 変わりゆく 世界における Onehealth	プログラム9-1 年次大会（小動物） 地区学会賞受賞講演	プログラム10-1 年次大会（公衆衛生） 教育講演 地区学会賞受賞講演	プログラム11-1 年次大会（産業動物） 地区学会賞受賞講演	JVMA企画③ 【アジア若手獣医師】	ブース・イベント ポスター発表など
						ウェルカム レセプション

プログラム7-2 【獣医学教育改革への 挑戦 スキルズラボを 活用した教育の 意義と効果】	プログラム8-2 【産業動物の アニマル ウェルフェア】	プログラム9-2 年次大会（小動物） シンポジウム	プログラム10-2 年次大会（公衆衛生） シンポジウム	プログラム11-2 年次大会（産業動物） シンポジウム	JVMA企画⑤ AAVS/FAVA 【Vet Ed Asia①】	ブース・イベント ポスター発表など
プログラム7-3 【獣医学教育の国際 化 アジアの獣医学教 育を世界水準に向上 させる取組み】		プログラム9-3 年次大会（小動物） シンポジウム	プログラム10-3 年次大会（公衆衛生） シンポジウム	プログラム11-3 年次大会（産業動物） シンポジウム	JVMA企画⑥ 【都市開発と野生動物】	

	JVMA企画⑧-1 【災害獣医療セッ ション】大規模災害へ の対応事例報告から 考えるこれからの 災害対策	プログラム9-4 年次大会（小動物） シンポジウム	プログラム10-4 年次大会（公衆衛生） シンポジウム	プログラム11-4 年次大会（産業動物） シンポジウム	JVMA企画⑨ 【WOAH ジェンダー、 ハンディキャップ】	ブース・イベント ポスター発表など
	JVMA 企画⑧-2 【災害獣医療 セッション】 大規模災害への 対応事例報告から 考えるこれからの 災害対策	プログラム9-5 年次大会（小動物） シンポジウム	プログラム10-5 年次大会（公衆衛生） 一般講演	プログラム11-5 年次大会（産業動物） 一般講演	JVMA企画⑩-2 ペットと飼主の健康: Thanks Buddy!】	

プログラム7-6 【シェルター獣医療】	JVMA企画⑩ AAVS 【Vet Ed Asia②】	プログラム9-6 年次大会（小動物） シンポジウム	プログラム10-6 年次大会（公衆衛生） 研究報告	プログラム11-6 年次大会（産業動物） 研究報告	JVMA企画⑪ 【東アジアサミット】 日台韓	ブース・イベント ポスター発表など

世界獣医師会大会 2026

日本から世界へ、 ワンヘルスの未来を発信

世界獣医師会 次期会長 藏内 勇夫



いよいよ本年4月21日から、世界獣医師会大会（World Veterinary Association Congress）が、31年ぶりに日本で開催されます。これは1995年の横浜大会以来となる歴史的な開催です。

世界中の獣医師や研究者らが一堂に会するこの大会は、単なる学術集会ではありません。世界の獣医界の関係者が、これからの地球社会にどう貢献していくのかを議論する場です。

テーマは「ワンヘルスで世界の獣医療が示す未来」。

本大会の中心テーマは「ワンヘルス」。ワンヘルスは動物・人・環境の健康は相互に深く関わっており、それらを統合的に捉える

ことでよりよい対策を講じようという取組です。

近年、地球規模でさまざまな課題が顕在化しています。新興・再興感染症、薬剤耐性（AMR）、気候変動、生物多様性の損失。これらはすべて、獣医師のみで対処できるものではなく、分野を越えた連携なしには解決できません。

ワンヘルスは単なる理念ではなく、今まさに世界が必要としている実践的なアプローチです。このワンヘルスは国連が掲げる持続的な成長目標（SDGs）と相互に補完する関係にあると考えています。SDGsは重要なのですが、環境対策と経済の対立と捉えられることも多いことが課題となっています。その達成のため、人類はより広い視野を持たなければなりません。そこで必要になるのがワンヘルスによるアプローチです。「経済」から視点を「健康」に移し、さらにその「健康」の概念を拡大することで、未来が環境との調和の中にあることを示し、かけがえのないものとして子どもたちにもしっかりと伝えていくことが大切です。

また、スポーツとワンヘルスも深い関係があります。一番わかりやすい例はオリンピックではないでしょうか。東京オリンピックの開催が1年間延期されたことは皆様の記憶に新しいことと思います。アスリートにとってコンディションを本番に向けて整えていくことが重要であることはいうまでもありませんが、その本番が1年間延期されてしまった。さらに、マラソンでは急遽、東京から札幌にコースが変更になりました。

いずれも感染症の発生や地球の温暖化といった、アスリート本人の努力だけではどうにもならないことが原因です。運命が変わってしまった選手も多くいることでしょう。ワンヘルスは選手が最高のパフォーマンスを発揮するためにも必要な考え方なのです。こうしたことをトップアスリートの皆様に自ら語っていただく機会もこの大会の中で設ける予定としています。

日本開催の意義

今回の日本開催は、アジア地域におけるワンヘルス推進の強いメッセージでもあります。

アジアは人口増加、都市化、環境変化など、多くの課題を抱える一方で、成長と可能性に満ちた地域でもあります。日本が中心となって国際的な議論の場を提供することは、地域全体の発展にとっても大きな意味を持ちます。

本大会では、感染症対策、公衆衛生、食の安全、環境保全など、多岐にわたる分野の専門家が登壇し、話をされ、議論をする予定です。世界各国から集う知見と経験が交差し、新たな協力関係が生まれることでしょう。

国際連携のさらなる深化へ

世界の課題は、一つの国や職域だけで解決できるものではありません。

だからこそ、国境を越えた対話と協力が不可欠です。

世界獣医師会大会は、各国の獣医師会、国際機関、研究機関、関連団体が直接交流できる貴重な機会です。ここで築かれる信頼関係とネットワークは、今後の国際的な連携を支える大きな財産となります。

日本の皆様にも、ぜひこの国際的な議論の場に参加していただきたいと思います。

未来世代へのメッセージ

本大会は、次世代の獣医師や学生にとっても大きな刺激となるでしょう。

世界の第一線で活躍する専門家の考えに触れ、多様な価値観に出会うことは、自らの視野を広げる貴重な経験となります。

未来を担う世代が国際的な視点を持ち、ワンヘルスの理念を共有することは、持続可能な社会の実現につながります。

世界とともに未来を描く

日本では31年ぶりの開催。

これは、日本獣医師界が積み重ねてきた信頼と実績の証でもあります。

2026年、日本から世界へ。

ワンヘルスの未来をともに描き、次の時代へとつないでいきましょう。

多くの皆様のご参加を、心よりお待ちしております。

開会式・基調講演

大会1日目(4月21日) 10:00~12:00

ホール
A

- 開会式 10:00~
- 基調講演 11:00~



[演者及びプロフィール]

喜田 宏

北海道大学ユニバーシティプロフェッサー
人獣共通感染症国際共同研究所 特別招聘教授 統括
ワクチン研究開発拠点 特任教授
WHO 人獣共通感染症対策研究協力センター長
獣医学博士, 日本学士院会員, 文化功労者

要 旨

One Health アプローチによる パンデミック・インフルエンザの理解と対策

喜田 宏 (北海道大学 人獣共通感染症国際共同研究所)

インフルエンザは人獣共通感染症である。病因のインフルエンザAウイルスの自然宿主は渡り鴨である。鳥インフルエンザウイルスとヒトの季節性インフルエンザウイルスの遺伝子分節が再集合(リアソートメント)すると、ヒトが免疫を持たない新規ウイルス株が出現する。このようなウイルスは、世界中の人々に感染を急拡大し、悲惨な結果を齎すパンデミックを起こす恐れがある。

将来のインフルエンザ・パンデミック発生に備え、One Health アプローチによって、鳥類、豚、その他の哺乳動物及びヒトのインフルエンザウイルスのサーベイランスをしっかりと進めるとともに、これらの宿主から分離されたウイルス株を収蔵する「北海道大学インフルエンザウイルス・ライブラリー」の継続的更新を図り、診断とワクチン製造に活用することが重要である。

さらに、新たなインフルエンザウイルスが出現した際に即座に応用可能な、より有効なワクチンや治療薬の開発を含む季節性インフルエンザ対策を強化することが極めて重要である。

本講演では、私達が進めてきた、半世紀以上にわたるインフルエンザウイルスの生態に関する研究成果を基に解明したパンデミック・インフルエンザウイルスの出現機構を示すとともに、将来のパンデミックに備えるための戦略を提案する。

インフルエンザとCOVID-19不活化ウイルス完全粒子ワクチンを混合し、単一製剤として開発する計画を進めている。この混合ワクチンは、動物実験で両ウイルスの感染防御効果の向上と両疾病の重症化を抑制した。同時に流行するウイルス感染症の対策として有望な結果である。

さらに、新規キャップ依存性エンドヌクレアーゼ阻害薬であるバロキサビル マルボキシルは、季節性インフルエンザのみならず、異なる亜型ウイルスによるパンデミック・インフルエンザに対しても有効である。このように、季節性インフルエンザ対策の改善と高度化は、パンデミック・インフルエンザに対する備えとして不可欠である。

市民講座

大会4日目 (4月24日) 9:00~12:00

ホール
B5

ワンヘルスのいろいろなカタチ

要旨

One Health for One Future —北海道大学 One Health リサーチセンターの取組み

堀内基広 (北海道大学大学院獣医学研究院, 北海道大学 One Health リサーチセンター)

One Health の概念は、1860 年代にドイツの病理学者 Virchow の人獣共通感染症の考えに端を発しているといわれ、2004 年のマンハッタン原則 (野生動物保全協会) で「人獣共通感染症の制圧と生態系の健全性維持には、多くのセクターの協働による領域横断的取組み “ワンヘルスアプローチ” が必要である」ことが提唱されたことにより明確化されました。「ヒトと動物の健康と環境の健全性を一つのものとして捉える」という概念は判りやすいですが、「ヒトと動物の健康と環境の健全性の維持及び向上」、「ヒトと動物の well-being」のために何をすべきか、言い換えると「ワンヘルスアプローチ」のアクションになると、具体性を見いだし難いと感じる場合が多いと思います。人獣共通感染症の出現による健康被害、社会経済被害を軽減するために、医学、獣医学、及び関連領域が連携した取組みの必要性が強調されてきました。しかし、「ヒトと動物の健康と環境の健全性の維持及び向上」をアウトカムと考えた場合、医学と獣医学の連携のみならず、多様な連携が考えられます。また、活動は家庭、コミュニティ、地域、国、グローバルなレベルまでさまざまであり、医学や獣医学が直接関与していない取組みも多々あります。

北海道大学は、わが国におけるワンヘルスの推進に関して、アカデミアの側からリーダーシップを発揮できる総合研究拠点として、2023 年 10 月に学内共同施設 (研究施設) 「One Health Research Center (OHRC)」を設置しました。感染症、保全医学、汎動物学、動物福祉、の 4 領域を教育研究及び活動の柱に据えて、以下の Slogan, Vision, Mission をモットーに教育・研究活動に邁進しています。

Slogan : One Health for One Future

Vision : 健全な生活環境を次世代に引き継ぐ

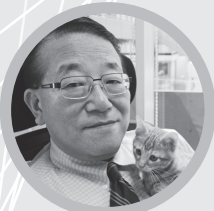
Mission : 人、動物、環境の健康・健全性を一つのものとして捉え、その維持と向上に寄与し、次世代に繋ぐためにアカデミアとしての役割を実践する。

当日は、われわれのワンヘルスに関する教育研究活動、社会連携活動の一端をご紹介させていただくことで、皆様のワンヘルスに対する理解が深まれば甚だ幸いです。

特別企画

大会中に行われる特別企画の一部をご紹介します。

このほかにも魅力あふれるプログラムが多数あります。ぜひご来場ください。



石田卓夫

大会 1 日目 (4 月 21 日) 15:00 ~ 18:00

ホール
C

伴侶動物医療の未来

■ 要 旨

獣医学は科学の一分野であり、科学は社会からの要望を反映して進歩するものである。家庭内飼育動物に対する人々の認識が変化し、その医療も「家族の一員のための医療」と考えられるようになってきている。すなわち、心理的・情緒的な面で共存関係にある動物たちで、人間への安全性が示され、獣医学や動物行動学が十分に発達して、家族からの要望に応えることができる動物が伴侶動物である。欧米では馬も伴侶動物として認識されていることもあり、昨今では動物の大小ではなく、社会における役割で分類されるようになって、これらの動物の獣医学を伴侶動物獣医学と呼ぶようになった。伴侶動物として含まれる動物種には、犬、猫、ウサギ、馬がある。それ以外の動物については、人間社会への危険性が平叙できないこと、獣医学が未発達で完全に病気が理解されていないなどの理由で、単にペットや愛玩動物というくくりでまとめられている。伴侶動物獣医学の意味が示すことは、家族の一員の医療として、人医療と同様の対応が求められ、獣医界としても十分対応可能になりつつあるということである。保険制度の違いや費用的な制約といった違いはあるものの、家族が求めるものは、「家族の一員」の健康と長寿、そして幸せな生活である。このような社会のニーズを受け、かつての小動物医療は、伴侶動物獣医学となって、めざましい発展を遂げている。ここで常にお手本となるのは医療の世界における進歩であり、それが一般化して価格が下がり、しかも特定の動物種に应用可能なことがわかれば、伴侶動物医療にも応用できるようになる。このシンポジウムでは、すでに未来を見据えて新しい診断・治療法を開発あるいは実践途上である各分野のエキスパートに参加いただき、これから 10 年以内の近未来には実用化され、常識的な動物医療となるであろう獣医学的な技術について説明をいただき、パネルディスカッションを行う。

■ 座 長

石田卓夫 (アジア小動物獣医師会 (FASAVA) 会長)

■ 講 演

1. 人医領域で使用されはじめている最先端の治療法
石田卓夫 (FASAVA 会長,
赤坂動物病院医療ディレクター)
2. 将来の伴侶動物臨床におけるより良い外科療法:
内視鏡手術と画像ガイド下治療
浅野和之 (日本大学教授)
3. 獣医腫瘍学における抗体治療時代の到来:
理論から臨床へ
水野拓也 (山口大学教授, 日本小動物医療センター)
4. その抜歯は本当に必要?:
獣医歯科学における臨床的意思決定を再考する
樋口翔太 (歯科医師, 獣医師)

5. 先進医療技術による動物とご家族の負担軽減
佐藤雅彦 (どうぶつの総合病院内科診療科主任)
6. 今後 10 年間における伴侶動物医療のがん治療
の展望 ~プレジジョンメディスン時代における
治療モダリティの再構築~
小林哲也 (日本小動物がんセンターセンター長)
7. 犬の気管虚脱の診断と治療: 次世代へ向けての
最新の科学的根拠に基づいたアプローチ
末松正弘 (AMC 末松どうぶつ病院院長)
8. 新時代の治療へ:
獣医学領域でのてんかん外科治療
長谷川大輔 (日本獣医生命科学大学教授)
9. 未来の獣医神経学: 低侵襲診断法の近年の進歩
金園晨一 (どうぶつの総合病院院長・神経病科主任,
ミズーリー・コロンビア大学非常勤教授)



上野 弘道

大会 3 日目 (4 月 23 日)

ペットと飼い主の健康 Thanks Buddy !

第 1 部 9:00~12:00

ホール
C

■ 要 旨

本プログラムでは、「ペットと飼い主の健康」をテーマに、人と動物の共生が社会にもたらす価値と、そこにおいて獣医師が果たすべき役割について多角的に考察する。

冒頭では、日本獣医師会よりステイトメントを発表し、伴侶動物との共生に関する今後の方向性を明確に示す。続く講演では、伴侶動物との暮らしが人の健康や社会保障制度に与える影響、さらにヒトとイヌのインタラクションがウェルビーイングに及ぼす効果について、科学的知見に基づき解説する。

最後に「ベストバディアワード」を通じて、人と動物の絆がもつ価値を可視化し、共生社会の実現に向けた意識を社会全体で共有する。

本プログラムを通じて、伴侶動物医療が担う社会的意義をあらためて確認するとともに、獣医師をはじめとする関係者が連携し、共生社会の構築に向けた具体的な実践へとつなげていくことを目的とする。

■ 日本獣医師会ステイトメント発表

森 尚志 (日本獣医師会小動物臨床委員会 委員長)
上野弘道 (日本獣医師会
人と動物の共生社会推進委員会 委員長)

■ 講 演

1. 伴侶動物との暮らしが人の健康及び社会保障制度にもたらす影響
谷口 優 (国研国立環境研究所 主任研究員)
2. ヒトとイヌのインタラクションとヒトのウェルビーイングの関係
菊水健史 (麻布大学 獣医学部・動物応用科学科 教授)

■ ベストバディアワード

司 会：小林元郎 (成城こばやし動物病院 代表)
コメンテーター：上野弘道

第 2 部 13:00~18:00

ホール
D1

■ 要 旨

本プログラムでは、人と動物がともに社会を支える存在である「ワーキングドッグ」に焦点を当て、伴侶動物との共生社会の実現に向けた理解を深めることを目的とする。

はじめに、盲導犬・聴導犬・介助犬に加え、CAPP 犬等の活動を紹介し、ワーキングドッグが人々の生活の質の向上や社会参加に果たしている意義を共有する。さらに、検疫探知犬等の紹介及びデモンストレーションを通じて、動物の能力が社会の安全・安心に具体的に貢献している現状を示す。

続く講演では、動物との共生をめぐる社会的課題や多様な視点を踏まえた提言を行い、最後の対談企画では、異なる立場の専門家が意見を交わすことで、共生社会に向けた今後の方向性を展望する。

本プログラムを通じて、ワーキングドッグを含む動物の社会的価値を再認識し、人と動物がともに生き、ともに社会を支える未来の実現に向けた議論と連携を促進する。

■ ワーキングドッグ紹介

内 容：盲導犬、聴導犬、介助犬、CAPP 犬、
検疫探知犬等の紹介・デモンストレーション
柴内晶子 (公社日本介助犬福祉協会 会長)

■ 講 演

1. 人と動物が共生する社会を実現するための取り組みに関する考察
東海林克彦 (日本愛玩動物協会 会長)
2. 「One Health」への貢献と、動物が近くにいることが当たり前な未来へ
児玉博充 (ペットフード協会 会長)

■ 対談企画

司 会：木村真治 (日本獣医師会 動物との共生社会推進委員会 副委員長)

パネリスト：上野弘道、谷口 優、菊水健史、東海林克彦、児玉博充

大規模災害への対応事例報告から考えるこれからの災害対策

～災害大国日本だからこそ世界に発信できる情報がある！～

■ 要 旨

日本は「災害大国」として、これまでに数多くの自然災害に直面し、その対応経験を蓄積してきた。2,000 以上の活断層を抱える日本列島では、これまで地震への備えが中心であったが、近年では台風や線状降水帯による豪雨災害が頻発し、被害の規模や頻度の増加が深刻な課題となっている。

こうした気象災害は、日本だけでなく、ヨーロッパやアジア各地でもモンスーンやハリケーン、さらに熱波や干ばつといった形で深刻化している。背景には地球温暖化による海面温度の上昇や、大気中の水蒸気量の増加があり、これが台風の勢力拡大や線状降水帯の発生頻度・強度の増大につながっていると指摘されている。

「One Health (ワンヘルス)」とは、「人の健康・動物の健康・環境の健全性は相互につながっている」という理念である。自然環境のバランスの崩壊が気象災害の一因であるとするならば、これに対処することはワンヘルスの実践の一環ともいえる。さらに、災害は国境を越えて影響を及ぼすため、国際的な情報共有や協力体制の構築は不可欠である。

また、災害による人的・経済的被害を軽減するためには、危機管理意識の共有と啓発がきわめて重要である。

本セッションでは、日本国内でのさまざまな災害対応や、獣医療体制の整備に関する情報を発信するとともに、国内外での取組みや知見を共有し、今後の大規模災害への備えを深めることを目的とする。

第 1 部 9:00～12:00

■ 座 長

平井潤子 (東京都獣医師会・日本獣医師会)
戸上由香梨 (ミュンヘン大学)

■ テーマ

さまざまな動物たちの災害時対応

■ 講 演

1. Setting the Global Standard:
WOAH's New Chapter on All- Hazards Emergency Management
Dr Jacqueline LUSAT
(Animal Health Information Officer)
WOAH (Regional Representation for Asia and the Pacific : RRAP)
2. 熊本地震による動物園動物の災害時対応の報告 松本充史 (熊本市動植物園 園長)
3. 能登半島地震による水族館動物の災害時対応の報告
加藤雅文 (のとじま臨海公園水族館 展示・海洋動物科 科長)

第 2 部 13:00～15:30

■ 座 長

平井潤子 (東京都獣医師会・日本獣医師会)

■ テーマ

日本のペットの避難対策の主旨に関する体制整備について

■ 講 演

1. 東日本大震災における対応について①
「警戒区域内の活動について」
青木正成
(一財)自然環境研究センター 研究主幹)
2. 東日本大震災における対応について②
「ペットの災害対策に関する環境省の取組みと今後の展望について」
石川拓哉
(環境省自然環境局動物愛護管理室 室長)

第3部 15:45～17:45

■ 座長

佐伯 潤 (大阪府獣医師会・日本獣医師会)

■ テーマ

獣医師会が実施した災害時支援

■ 講演

1. 熊本地震

江川佳里子 (熊本県獣医師会 常務理事・事務局長)

2. 西日本豪雨災害

甲斐みちの (岡山県獣医師会 副会長/日本獣医師会 危機管理室 災害対策委員)

3. 令和6年能登半島地震 地震・津波・火災・土砂災害を乗り越えて

田村兼人 (石川県獣医師会 副会長)

4. 災害獣医療獣医師の育成について

藤本順介 (東京都獣医師会 危機管理室 情報統括/日本獣医師会 危機管理室 災害対策委員長)

大会4日目 (4月24日) 9:00～12:00

ホール
G402

VetEd Asia 2026 : 獣医学教育と協働を促進するためのフォーラム

■ 要旨

VetEd Asia は、アジア獣医系大学協会 (AAVS) が主催する、獣医学教育者及び学生が集い、獣医学教育に関するアイデア、革新、並びに最新の動向を共有するためのシンポジウム及びネットワーキング・フォーラムである。VetEd Asia 2026 では、獣医学教育研究の発表、ジェンダー平等・障害・社会的包摂 (GEDSI) をテーマとしたワークショップ、並びに科学賞セッションなど、多様なプログラムが予定されている。

AAVS は、アジア 14 カ国にわたる 50 以上の獣医系大学から構成されるネットワークであり、2001 年の設立以来、獣医学分野における教育、研究、並びに公共サービスの発展に取り組んできた。その活動は、東京大学に設置された事務局によって調整され、世界獣疫事務局 (WOAH) アジア太平洋地域事務局の支援のもと、獣医学教育の高度化、獣医学教育研究、動物福祉教育の 3 つのワーキンググループによって推進されている。

2022 年に設立された AAVS 獣医学教育研究ワーキンググループ (VERWG) は、エビデンスに基づく教育研究文化の醸成を目的としている。会員数は 95 名に拡大し、効率的な運営モデルにより VetEd Asia 会議シリーズが成功裏に立ち上げられた。

VetEd Asia 2024 会議は、VEEWG、FAVA、AAVMC (CIVME) との連携により開催され、2025 年には AI や症例基盤学習などをテーマとした CPD ウェビナーが実施された。

これらの取組により、地域内連携と情報交換が強化され、アジア全域における獣医学教育水準の向上と獣医師人材育成に貢献している。

AAVS 獣医学教育高度化ワーキンググループ (VEEWG) は、VetEd Asia 2026 において GEDSI をテーマとしたセミナー・ワークショップを主導する予定である。

VetEd Asia 2026 に向けて、AAVS は世界獣医師会 (WVA) と協働し、獣医学教育における卓越性の推進と地域間協力の強化を目指している。

■ 主催

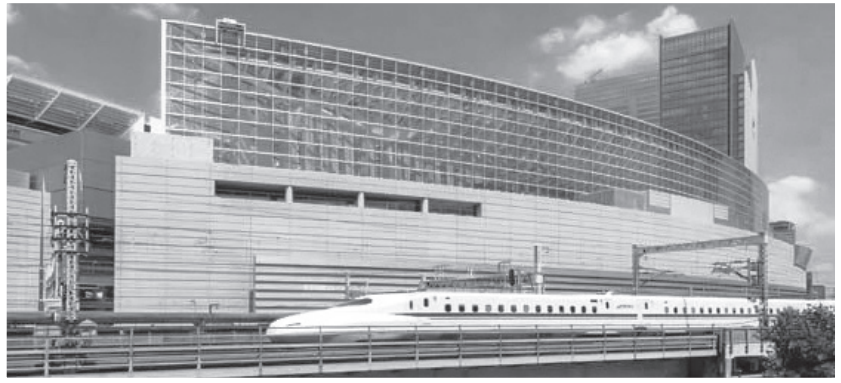
アジア獣医系大学協会 (Asian Association of Veterinary Schools : AAVS)

会場のご案内

東京国際フォーラム

〒100-0005

東京都千代田区丸の内 3丁目5-1



交通のご案内

JR線 JR Line

- 有楽町駅より徒歩1分
- 東京駅より徒歩5分
(京葉線東京駅と地下1階コンコースにて連絡)
- 1-minute walk from Yurakucho Station
- 5-minute walk from Tokyo Station (the concourse on the first basement floor connects with Tokyo Station on the Keiyo Line)

地下鉄 Subway

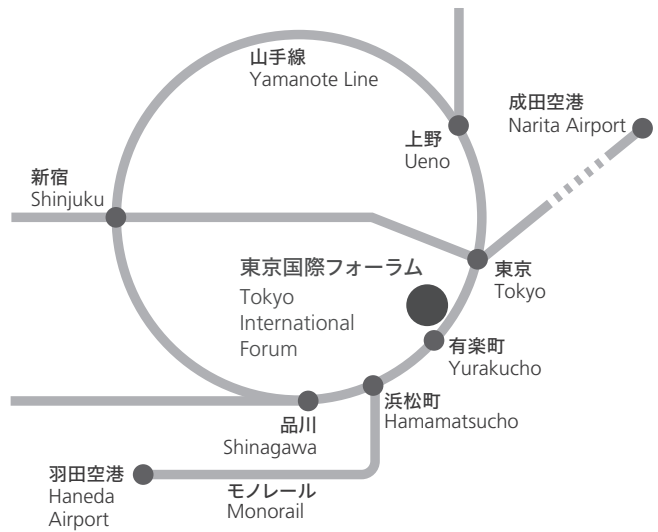
- 有楽町駅より徒歩1分(地下1階コンコースにて連絡)
- 1-minute walk from Yurakucho Station (connects to the concourse on the first basement floor)

成田空港から From Narita Airport

- リムジンバスで東京駅まで80-90分
- JR成田エクスプレスで東京駅まで53分
- 80-90 minutes to Tokyo Station by limousine bus
- 53 minutes to Tokyo Station by Narita Express

羽田空港から From Haneda Airport

- モノレール浜松町駅まで23分
- JR浜松町駅より有楽町駅まで4分
- 23 minutes by monorail to Hamamatsucho Station
- 4 minutes from JR Hamamatsucho Station to Yurakucho Station



会場概要

